

曹操伏皇后及び二皇子と弑す

劉備孔明と三顧す

帝、許に遷さるゝときに當りて董承、帝の衣帶中の密詔を受けて將に劉備と謀りて曹操を誅せんとす謀泄る操承を殺す承の女、貴人と爲る操并せて之を殺す皇后伏氏懼れて父完の書を與へて操を圖らむ謀亦泄る操、郝慮を以て節を持って策して皇后の璽綬を収めしめ華歆副と爲り兵を勤して宮に入りて伏后を収む伏后戸を閉ちて壁中に藏る歆戸を壞り壁を發きて就きて伏后を率き出す后髪を被り跣足して外殿を過き帝と泣きて訣して曰、復た相活すること能はさるかと帝曰、我も亦命の何れの時に在るを知らずと操遂に后及び二皇子を併せ殺す後ち操太中大夫孔融を族滅す孔融固と鄭玄に師事す鄭玄は馬融に學ひ經傳治熟し稱して純儒と爲す齊魯の間之を宗とし其の卿名

を易へて鄭公卿と云へり融嘗て戯れて操を以て大逆不道と稱す操大に怒り遂に之を殺す是より先き太尉楊彪の子修、操に従ひ江南に至りて曹娥の碑を讀む碑背に八字あり黃絹幼婦、外孫壘白と曰ふ操解せず修に問ひて曰、卿知るや否や修曰、之を知れり操曰、且つ言ふ勿れ吾が之を思ふを待てと行くこと三十里にして之を得たり因りて修を以て解せしむ修曰、黃絹は色絲、色絲は絶の字、幼婦は少女、少女は妙の字、外孫は女子、女子は好の字、壘白は辛を受く受辛は辭の字と操曰、一に吾か意の如しと遂に其の才を忌みて之を殺せりと云ふ

曹操、呂布を縊殺す 劉備、孔明を訪ふ

時に呂布關中より袁術に歸し至る所兵を恣にして掠奪せしかは操兵を遣し之を攻めしむ布走りて劉備に歸し後ち其の人心を得るを惡み自ら備を攻め其の妻子を虜にす備、單身出て操に歸す操厚く之を

遇し豫州の牧と爲す或人操に謂ひて曰、備、英雄の志あり今早く圖ら
 されは後ち必ず患を爲さん操以て郭嘉に問ふ嘉曰、是あり然れども
 公、義兵を起し天下の害を除く俊傑を招く猶うの未たしを懼る今、備
 は英雄の名あり窮を以て已に歸す之を害せば是れ賢を害するを以て
 名と爲すなりと操笑ひて曰、君之を得たりと遂に糧食を給ひ散兵を
 收め東の方、布を下邳に攻めしむ布困迫して操に降る之を縛りて曰、
 虎を縛するは急にせざるべからずと卒に之を縊り殺し備をして袁術
 を攻めしむ袁術又うの敗る所と爲り憤慨血を啜きて死す袁紹操を
 攻め官渡(延州、武縣の東に在り)に相戦ひて遂に死す時孫策既に江東を定め
 操を襲はんと欲し未だ發せずと殺す所の吳郡(今、蘇州)の守許貢の奴
 其の出で獵するに因りて篋竹中に伏して之を射る瘡甚し弟權を呼
 びて代りて其の衆を領せしめて曰、江東の衆を擧げて機を兩陣の間
 に決し天下と衡を争はんことは卿我に如かず賢に任し能く使ひ各、

うの心を盡して江東を保たんとは我れ卿に如かずと言畢りて卒す
 年二十六

備既に操に遣されて袁術を攻めんとし因りて徐州に之き刺史を殺し
 關羽を留めて下邳を守らしむ時に郡縣多く操に叛き備に應ず操之を
 撃ち進みて關羽を下邳に禽にす備遂に荊州に奔り劉表に歸す表備を
 禮する甚た厚し備嘗て表か座に於て起ちて厠に至り還りて慨然とし
 て涕を流す表怪み之を問ふ備曰、吾身常に鞍を離れず髀肉皆消ゆ今
 復た騎らして髀裏肉生す日月流るゝか如し老將さに至らんとす功
 業建たす是を以て悲むのみと是の時操、烏桓を破り胡漢の兵二十餘
 萬を降し勢太た盛なり

當時瑯琊(今の山東省の州府邊の地)の諸葛亮字は孔明と云ふもの襄陽(河南に屬す)の
 山中に寓居し躬ら隴畝を耕し好みて自ら管仲樂毅に比す時の人皆
 之を笑ふ惟た穎川の徐庶、崔州平と之を許すのみ時に劉備、劉表に依

り荆州に在りて士を襄陽の司馬徽に訪ふ徽の曰、時務を識るは俊傑に在り此の間自ら伏龍鳳雛あり諸葛孔明、龐士元なりと龐士元は即ち仲長統にして見識あり嘗て昌言論を著し治亂興亡の理を論し大に名を爲せり徐庶も亦備に謂ひて曰、孔明は臥龍なり將軍豈に之を見るを願はんか備曰、君與に俱にして來れよ、曰、此の人就きて見る可し屈致すべからず將軍枉駕して之を顧みよと備乃ち孔明を草廬の中に三顧し遂に人を屏け策を問ふ亮對へて曰、操百萬の衆を擁し天子を挾みて諸侯に令す此れ誠に與に鋒を争ふべからず孫權江東を據有せりうの國險にして民附き賢能之か用を爲す此れ與に援を爲すへきも圖るべからず荆州は武を用ふるの國にして其の主守ると能はず此れ殆ど天の將軍を資くる所以なり益州(蜀)は險塞にして沃野千里物産贍富所謂天府の土なり若し將軍にして荆益を跨有してうの巖阻を保ち天下變あれば荆州の軍は宛洛に向ひ益州の衆は秦川(水、京兆、秦、此の東南)

に出る漢に出ては孰か簞食壺漿して將軍を迎へざるものあらん是の如きは霸業成る可し漢室興るべしと備之を善しとして情好日に密なり關羽張飛悦ひす備曰、孤の孔明あるは猶ほ魚の水あるか如し願はくは諸君復た言ふ勿れと

亮、救を孫權に求め 赤壁の戦

建武十三年劉表卒し其の子琮、荆州を擧げて操に降る荆州の人多く備に降附す備、關羽を遣り船に乗して江陵(南郡、治にして今の湖、北即ち春秋の楚都)に相會せんと約し先づ自ら江陵に奔る操之を追ふ時に張飛水に據り橋を斷ち目を瞋し矛を横へて曰、身は是れ張翼徳なり來りて共に死を決すべしと操の兵敢て近くものなく趙雲、備か子禪を抱き關羽の船と會し濟るとを得たり備既に逃れて夏口(江夏、縣、江、北)に在り亮、備に謂ひて曰、事急なり請ふ救を孫將軍に求めんと亮、魯肅と俱に權に詣る權大に

悦ふ』時に操權に書を遺りて曰、今水軍八十萬衆を治めて將軍と吳に會獵せんと權之を群下に示す色を失はざるものなり張昭之を迎へんと請ふ魯肅以て不可と爲して曰、衆議を察するに與に大事を圖るに足らずと時に周瑜、潘陽に在り肅、權を以て召さしむ瑜至り謂ひて曰、操名を漢の相に託すと雖も實は漢の賊なり將軍江東に割據し兵精くして漢家の爲めに殘賊を除くに足らん況や操自ら死を送る而るを之を迎ふへけんや請ふ將軍の爲めに之を籌らん今北土未だ平ならず馬超、韓遂、尙ほ關西に在りて操の後患を爲す且つ操、今鞍馬を捨て舟楫によりて吳越と衡を争ふ又今日盛寒にして馬、以て藁草なり中國の士衆を驅りて遠く江湖の間に涉る是れ水土に習はされは必ず疾病を生せん此の數者兵を用ふるの患なり請ふ五萬の精兵を得て將軍の爲めに之を破らんと權大に善と稱し刀を抜き前の案を斫りて曰、諸將吏敢て復た操を迎へんと言ふものあらは此の案と同じから

んと因りて瑜の背を撫して曰、卿の言此に至る甚だ孤か心に合へり、張昭等深く望む所を失ふ獨り卿と魯肅と孤と同一きのみ此れ天の卿等二人を以て孤を賛けしむるなりと遂に瑜を以て三萬人を督せしめ備と力を併せて操を迎へ撃ち魯肅を以て方略を贊助せしめ劉備と力を併せ進みて赤壁(山名、武昌府嘉魚縣の東北)の下に遇ふ瑜の部將黃蓋曰、操か軍方々に進み來り船艦首尾相接す燒きて走らすへいと乃ち蒙衝(牛皮を以て覆ひ矢石を以て破る能はる船)圍艦十艘を取りて燥荻枯柴を載せ油を其の中に灌ぎて帷幔に包みて上に旌旗を建て豫め走舸を備へて其の尾に繫き先づ書を以て操に遺り詐り降らんと欲すと爲す時適、東南風急なり蓋三十艘を以て著けて尤も前にあり中江に追ひて帆を舉げ餘船次を以て俱に進む操か軍みな營を出て立ちて觀、互に指し言ふ彼等降らんと北軍を去ること二里餘同時に火を發す火烈しく風猛くして船の往くこと箭の如く遂に北船を燒盡して延きて岸上の營陣に及

ひ烟焰天に漲り人馬溺焼く死するもの甚た衆し瑜等輕銳を率い雷鼓して大に進む北軍大に壞れ操走る劉備、周瑜、水陸並ひ進み追ひて南都に至り操か軍死するもの大半操乃ち曹仁を留めて江陵を守らめ樂進、襄陽を守り遂に軍を引きて還る」後ち操屢兵を權に加ふれども志を得ず因りて歎いて曰、子を生まは當さに孫仲謀(權の)の如くなるへ一向の劉景昇(表の)の兒子は豚犬なるのみと

劉備荆州を借る并に自立して漢中王と爲る

孫權、備をして荆州の牧を領せしむ、周瑜、荆江南岸の地四郡(武陵、桂陽、南平、零陵)を分ちて備に給す備、營を油口(南平郡界)に立て名を公安と改む權、其の娣を以て備に妻す娣、才捷にして剛猛自ら諸兄の風あり侍婢百餘人みな刀を執り侍立す備毎に入ること其の圖る所と爲らんことを恐れて心常に凜然たりきと云ふ」後ち劉表の故吏士次第に備に歸服

し先きに周瑜給せし所の地少くして其の衆を容るゝに足らざるを以て孫權に京口城に見し荆州に都督たらんことを求む荆州八郡あり瑜既に江南四郡を以て備に給す今又江漢の間四郡を兼得せんと欲するなり是に於て瑜權に上疏して曰、備は蟻(水蟲、蛇に似て四足)の姿を以て關羽、張飛、熊虎の將あり必ず屈して人の用を爲すものにあらず宜しく備を徒して吳に置き官室を築きその美女玩好を多くして其の耳目を娛ましめ他に人をして各一方に置き瑜の如きものを以て挟みて與に攻戦すへからしめは大事定むへし而るに今猥りに土地を割き資を以て與へ此の三人をして俱に疆場に在らしめは恐らくは蛟龍雲雨を得て終に池中の物にあらざらんと呂範亦勸めて留らしむ權、當時曹操の北方にありて英雄を收攬するを以て瑜、範の言に従はず備、公安に還り久くして之を聞き歎いて曰、天下智謀の士見る所大抵同一なり前時孔明の孤を諫めて行く莫からしめしは此を慮ればなり

と』周瑜權を辭して江陵に還る途中病困せしかは賤を權に與へて曰、
 修短は命なり誠に惜むに足らず但微志未だ展ひず教命を奉せざる
 を恨むるのみ方今曹操北に在り疆場未だ靜ならずして劉備を寄寓せ
 しむるは虎を養ふに似て天下の事未だ終始を知らず此れ朝士肝食の
 秋、至尊垂慮の日なり魯肅は忠烈にして事に臨みて苟もせず以て瑜
 に代ふへし儻一言ふ所采るへければ瑜死するも朽ちずと遂に巴丘に
 卒す年三十六權聞きて哀慟して曰、公瑾は王佐の資なり今忽ち短命
 せり孤孰れに頼らんやと厚く葬り其の女を以て己の子、登に妻さし
 め二子循、及び胤を都尉と爲すと云ふ』是に於て魯肅代りて瑜の兵
 を領し權に勧めて荊州を以て劉備に借さしめ與に曹操を拒かんと請
 ふ權之に従ふ』權の將呂蒙初め學はす權、因りて謂ひて曰、卿今職に
 當り事を掌る學はすんはあるへからずと蒙辭するに軍中多務を以て
 す權曰、孤、豈に卿の經を治め博士たるを欲せんや但だ當さに涉獵し

て往々事を見るへきのみ卿、多務と言ふも孤に孰若うや孤嘗て書を
 讀み自ら以爲らく大に益する所ありと蒙乃ち始めて學に就く後ち魯
 肅、蒙と論議し大に驚きて曰、卿今の才略復た吳下の阿蒙にあらず蒙
 曰、士別れて三日なれば即ち更に目を刮りて相待つへし大兄何う事
 を見るの晩きやと肅大に其の人と爲りを異とし友を結びて別る』劉
 備初め從事龐統を用ひて來陽(衡州)の令と爲す、治まらず魯肅備に書
 を遣りて曰、士元は百里の才に非らず治中別駕(漢制治中は刺史に従ひて郡
 政を司る別駕と行る別駕に一乘馬に乘す)と爲らしめは乃ち其の驥足を展すことを得んのみと諸葛亮も亦
 之を言ふ備因りて治中と爲し親待す後ち龐、益州を取ること勸む
 備其の言に従ひ關羽を留めて荊州を守らしめ兵を引きて流に沂り巴
 より蜀に入り巴郡の太守嚴顔を獲たり張飛、顔を呵して曰、汝初め何
 う降らざる顔曰、卿等無狀にして我州を侵奪す我州には但、斷頭將軍
 ありて降將軍無しと飛壯として之を釋し引きて賓客と爲す龐統流矢

に中りて卒す備軍を引ききて劉璋を襲ひ成都に入る備初め荊州に在りしとき孫權使を遣り劉璋を攻めんと告ぐ備報して曰、益州民富み地險なれば劉璋弱しと雖とも自ら守るに足る而るに今師を蜀漢に暴し曹操輩をして其の隙に乗せしむるは長計にあらず且つ備は璋と託して宗室たり冀はくは威靈に憑りて漢朝を匡さんと孫權聽かず孫瑜をして水軍を率わ蜀に向はしむ劉備瑜に謂ひて曰、我が宗室攻められて救ふこと能はず何の面ありて天下に立たん吾れ髪を被りて山に入るへ」と關羽をして江陵に屯し張飛をして秭歸に屯せしめ自ら孱陵に住す權已むを得ずして瑜を引還さしむ備西の方劉璋を攻むるに及びて孫權怒りて曰、猾虜敢て詐を挾む此の如しと是に於て權諸葛瑾をして備に従ひて荊州を求めしむ備肯て還さず遂に之を争ふ已にして荊州を分つ備は蜀より漢中を取り自立して漢中王と爲る

漢中の將關羽江陵より出て樊城を攻め襄陽を取る許より以南往々遙に羽に應じ威華夏に震ふ曹操許都を徙して其の鋒を避けんと議するに至る司馬懿曰、備と權と外親くして内疎し關羽志を得るは權の必ず欲せざる所ならん宜しく人を遣り權に勸めて其の後を躡せしめ江南を割きて權に封することを許すへ」と操之に従ふ時に魯肅已に死し呂蒙之に代り亦權を勸めて羽を圖る操の師樊城を救ふ權か將陸遜又羽の後を襲ひ羽狼狽して走り還り兵皆解散して纔に十餘騎を餘す權か軍羽を獲て之を斬り遂に荊州を定む

魏王操卒す

曹丕帝と山陽公に封す

建安二十五年正月魏王操卒す操人と爲り英邁權數にして機を決し戰を爲し博聞にして文辭を克くす誓す所の孫子注あり初め袁州の牧より入りて丞相と爲り魏公に封せらる已にして爵を進めて王と爲り

天子の車服を用ひ出入に警蹕し子、丕を以て王太子と爲す嘗て、孫權を封して驃騎將軍と爲し荆州の牧を領し南昌南昌縣は豫州に屬す侯に封せしむ權大に喜ひ上書して自ら操の臣と稱し天命を稱説し操をして天子の位に就かめんとせり操、其書を以て左右に示して曰、是の兒吾を踞して爐火の上に著けんと欲するものかと蓋、漢は火徳を以て王たり故に權の已れをして其上に加へめんと意なりと爲して左右に問ひ衆心を觀んと欲せしなり侍中陳群等皆曰、漢祚已に終へしは今日に非らず孫權遠く臣を稱す此れ天人の應なれば宜しく大位を正すへしと操曰、若し天命吾にあらは吾は周の文王たらんと從はず後ち又令を下して曰、孤始め譙東に於て精舍譙縣を築き、時を待ちて仕へんと欲せしか意の如くならず徴されて校尉と爲り遂に國の爲めに賊を討たんと欲す墓道に題して漢のものとの征西將軍曹侯の墓といはしむるこゝ吾志なれ然るに今位人臣を極む人遂に妄に吾を誹譏す故に

今諸君の爲めに之を道ひ聊か謗を損せんと又其の死なんとするとき遺令數百言ありしも一言禪代の事に及ふなり史氏云ふ其の言蓋し禪代の事は自ら子孫の爲る所にして吾未だ嘗て教へて爲さしめざるを後世に明にして天子を以て子孫に遺し身漢臣の名を享けんとなり其の生平の姦此の如しと操卒して丕、遂に帝に迫りて位を禪らしめ帝を以て山陽公と爲し曹操を諡して武帝と云ふ時に我が紀元八百年なり

獻帝位に在り改元するもの三つ曰、初平、興平、建安、建安元年より二十五年に至り曹操政を爲すの時なり禪位の後十四年にして卒す漢高祖帝と稱せしよりは是に至りて二十四世四百二十六年にして亡ひたり時に劉備、蜀に在りて帝位に即き孫權は吳にありて魏と互に鼎足の勢を爲す是より後を三國とは云ふなり

三國（魏、漢、吳）

按するに天下一統にあらざるものはもと各自に紀すへきなれども三國正統の事に至りては先儒各説あり温史は魏を以て統を接し綱目は蜀に予へたり余其何れか是なるを知らずと雖ども此篇は魏を以て提頭に置き同時の吳漢二國を其間に附す若し夫れ正統の如何を論するに至りては讀者の意見に任せて可なり

巫峽の戦争

吳魏通好を絶つ

高祖皇文帝姓は曹氏、名は丕、沛國譙の人禪を漢に受け帝と爲り父操を追尊して太祖武帝と爲し黃初と改元し洛陽に都す當時蜀中言あり曹丕篡立し漢の献帝己に害に遇ひしと是に於て劉備喪を發し服を制し帝を諡して孝愍皇帝といふ後ち數月を歴て帝位に武擔

（山の名、成都府に在り）に就き章武と改元し諸葛亮を以て丞相と爲し許靖を司徒と爲し宗廟を立て高皇帝以下を袷祭す

初め車騎將軍張飛雄壯威武なること關羽に亞く羽善く卒伍を待つも士大夫に驕る飛は士大夫を待禮するも軍人を恤まず漢主常に戒めて曰、卿は刑殺すること既に度に過ぎ又日に健兒を鞭撻して左右に在らしむ此れ禍を取るの道なりと飛猶悛めず是に於て漢主關羽の吳の爲めに殺さるゝを耻ちて自ら將とし孫權を伐ち飛をして兵萬餘を率ゐて發せしむ發するに臨み飛の帳下の將、張達、范疆、飛を殺し其の首を以て孫權に犇る漢主歎いて曰、噫飛死せりと軍を進めて權の軍を巫峽に破る孫權和を乞へとも許さず進みて巫峽（道の名、四川に在り）夷陵（今の湖北宜昌府）に至り數十屯を立て正月より七月に至り吳の將陸遜と相持す一日陸遜漢軍を攻めんとす諸將留めて曰、之を攻むる初めに於てすへきに今相守る七八月に經たり今や其の諸要害皆已に

固く守る之を撃つも利無くと遜曰、其の初め思慮精專未だ犯すへかず今住まると已に久し兵疲れ意沮み計復た生せずと乃ち其の兵を以て各一把茅を持せしめ勢を合せ氣を作し火攻を以て諸軍と同時に俱に攻め漢の諸將を斬り其の四十餘營を破る漢主遁走して僅に白帝城に入るを得たり其の將傅彤獨り殿戦し兵衆を喪ひしも氣益烈し吳人之を諭さしめんとす傅罵りて曰、吳狗安んぞ漢の將軍にして降るものあらんと遂に死す其の従事程幾亦留り戦ふ衆の遁れんことを勸む幾曰、吾軍にありて未だ走るとを習はずと亦遂に死す吳は戦に勝ちしも後ち使を遣して和を漢に求め吳漢復た相互に通好し遂に吳魏の好相破るに至れり

初め漢主、吳を攻めしときに當り權使を魏に遣す魏、權を封して吳王と爲す魏主吳の使、趙咨に問ひて曰、吳王頗る學を知るか咨曰、吳王賢に任し能を使ふ志、經畧に在り餘閑ありて書史を博覽すと雖も書生

の章を尋ね句を摘むに效はずと魏主又問ひて曰、吳は魏を難かるか咨曰、帶甲百萬江漢を池と爲す何の難かることかあらん、曰、吳に大夫の如きもの幾人かある、咨曰、聰明特達のもの八九十人、臣の比の如きは車にて載せ斗にて量るとも勝けて數ふへからすと後ち魏主、吳に質子を送らんことを責む至らす魏主大に怒りて之を伐つ權亦是より専ら漢と和す後ち魏主復た舟師を以て吳を伐ち江陵に至る吳の將徐盛艦を江に列し疑城假樓を爲り固く守る魏主戎卒十餘萬旌旗數百里江を渡るの勢あり時適く江水盛に漲り波濤洶々山を捲くか如し魏主、臨望し歎して曰我れ武夫千群ありと雖も施す所なし是れ固に天の南北を限る所以なりと遂に師を引きて還れり

劉備、孔明に遺囑す 孔明出師の表

時に劉備病みて卒す終りに臨み孔明に謂ひて曰、君か才曹丕に十倍

す必ず能く國家を安んじ終に大事を定めん嗣子輔くべくは之を輔
 けよ如し其れ不可ならは君自ら取るへ」と亮涕泣して曰、臣敢て股
 肱の力を竭し忠貞の節を效し繼くに死を以てせざらんやと、又其子
 禪を戒めて曰、惡小なるを以て爲すこと勿れ、善小なるを以て爲さ
 ると勿れ汝丞相亮に事ふること父の如くせよと劉備人と爲り寛厚
 にして誠を以て士を待つ其の初め益州を取らんとするるとき龐統に謂
 ひて曰、今吾と水火を爲すものは曹操なり操、急を以てせは吾は寬を
 以てし、操暴を以てせは吾は仁を以てし、操誦を以てせは吾は忠を以
 てして毎に操と反せは事成るへきのみと是れ以てうの人と爲りを知
 るへし」備壽六十三太子禪即位す是を後皇帝といふ時に我か紀元八
 百八十二年なり

孔明遺託を受け禪を輔佐し官職法制を修め更に吳と好を通ず時に南
 夷漢の畔く孔明往きて之を平け其の將孟獲を囚へ營陣を觀せしむ

獲曰、吾向に虚實を知らず故に生獲せらる今此の營の如くなれば勝
 ち易きのみと孔明乃ち縦して更に戦はしめ七縦七禽す獲大に畏服し
 て曰、公は天威なりと南人復た背反せず」魏主丕殂し諡して文皇帝
 と云ふ其の子叡立つ是を烈祖明皇帝といふ

烈祖明皇帝名は叡、其の母嘗て誅を被る不嘗て叡と出で、獵し子母
 の鹿を見て已れ其の母を射て叡をうの子を射らむ叡泣きて
 曰、陛下已に其の母を殺す臣うの子を殺すに忍ひすと丕爲めに惻然
 たり是に至りて位に登る」是の時孔明諸軍を率ゐて北の方魏を伐つ
 發するに臨み出師の表を上る其の大要、刑罰を嚴にし賢能を親み小
 人を遠け以て漢室を再興せんことを述へて後ち遂に漢中に屯す」明
 年大軍を率ゐて祁山(西和州に在り)を攻む初め魏は漢の昭烈既に崩して寂
 然として聞ゆる無きを以て意を加へて備へさりしか亮の出づるを聞
 き大に恐懼し關中響の震ふか如く亮に應じ、魏主長安に如き張郃を

して歩卒騎五萬を以て之を拒かむ亮、參軍馬稷を以て之を拒かむ稷、亮の節度の違ふを以て卻大に之れを破る亮乃ち軍を引き漢中に還り自ら咎を引き躬を責め失ふ所を謝し愈銳を養ひ已にして復た漢主の上表して曰、先帝臣に委託すること甚厚し臣鞠躬して力を盡し死して後に己まん成敗利鈍に至りては臣か逆しめ觀る所にあらざるなりと世之を後出師の表といふ乃ち兵を引きて散關(鳳州の嶺)より出て陳倉(扶風)を圍む亮食盡き引き還る魏將軍王雙亮を追ふ亮撃ちて之を斬る

孔明復ひ祈山を圍む

司馬懿、魏主曹爽を殺す

是の時吳王孫權自ら皇帝と稱す是を太祖大帝と爲す父堅を追尊して武烈皇帝といひ己にして建業(郡江東に屬す)に遷都せり諸葛亮又

魏を代ち祈山を圍む魏、司馬懿を遣り亮を拒かむ懿又張郃を以て亮に向はしむ亮逆へ戦ひ大に敗る郃伏弩に中りて死す亮還りて農を勸め武を講し木牛流馬(牛馬の状に象り米と其の中を運搬せしむる具なり)を作り民を息へしを休め三年にして衆十萬を悉して渭南に進軍して魏を伐つ司馬懿兵を引きて拒守す亮前に數出て糧繼かす己れの志をして伸長せさらしめしを以て乃ち兵を分ちて屯田し耕すものをして渭濱居民の間に雜へしむ百姓爲めに安堵して軍私なく亮數戰を挑むも懿出でず乃ち懿に遺るに巾幗(婦人の)婦人の服を以てす使者懿か軍に至る懿其の寢食及び事の煩簡を問ひて戎事に及はず使者曰、諸葛公夙に興き夜に寐ね罰二十以上を皆親ら覽る噉食する所は數升に至らずと懿人に告げて曰、食少ふして事煩し其れ能く久しからんやと幾何も無くして亮營中に卒す百姓奔りて懿に告く懿之を追ふ亮の將姜維、長史楊儀を以て旗を反し鼓を鳴し懿に向はんとするか若くせし

む懿肯て逼らす是に於て儀陣を結びて去りて喪を發す百姓之か爲
 めに諺して曰、死せる諸葛、生ける仲達(字懿)を走らむと懿笑ひて
 曰、吾能く生を料れども死を料ること能はざる故なりと』亮嘗て兵
 法を推演して八陣(即の祖立天地風雲と以て四正)の圖を作る是に至りて
 懿の營壘を案行して歎いて曰、天下の奇材なりと亮政を爲すに私
 なし馬稷素より亮に知らる其の軍律を犯すに及びて流涕して之を斬
 りうの後を郵む李平、廖立、皆亮か爲めに廢せらる亮の喪を聞くに及
 びて皆悲慟病を發して死するに至る其の誠を以て人に接するに此の
 如し漢帝諡して忠武といふ

司馬氏の專恣

漢魏の末路

魏主、性土功を好む是より先き許昌宮を治し後ち又洛陽宮を作り長
 安の鐘簷、橐駝、銅人、承露盤、を洛陽に徙す盤折れ聲數十里に聞ゆ銅

人重くして運すへからす乃ち大に銅を鑄して銅人二を鑄る又士山
 を芳林園に起し花卉雜木を植ゑ禽獸をうの中に致す王肅、陳群等諫
 むれども聽かず肅強聞博識にして著作數多あり後ち魏主廂し太子芳
 八歳にして位に即く司馬懿、曹爽、遺詔を受けて政を輔く後ち數年を
 經て懿は其の子昭と謀りて爽の逆謀を誣ひて其の黨與三族を誅し遂
 に自ら丞相となれり是より魏の政は司馬氏に歸し其の勢甚た盛なり
 し後ち懿薨して其の子師、撫軍大將軍と爲り益威權を專にし遂
 に帝を廢して邵陵公と爲し更に高貴郷公髦を立てたり時に揚州の都
 督母丘及ひ諸葛誕(字幼明)兵を起して司馬昭を討す克たすして死す昭
 は師の弟にして師卒し昭威權を擅にせり魏主髦其の威權日に去るを
 見て忿怒に勝へす其の臣王沈、王經、王業等を召して曰、司馬昭の心
 は路人も知る所なり吾れ坐して廢辱を受くること能はず今日當さに
 卿等と自ら出て之を討すへ」と業走りて昭に告ぐ經、魏主の意に

従はざるを以て髦遂に劍を抜きて輦に乗り兵を率ゐて昭を攻む昭の
黨賈充魏主と戦ひ遂に戈を拙きて魏主髦を刺し車下に殞死し追廢し
て庶人と爲し葬るに民禮を以てし曹操の孫燕王宇の子、瑾を迎立し
て元皇帝と爲す時に我か紀元九百二十年なり

是より先き吳主權卒し太子亮立つ頗る聰明なりし大將軍孫綝子の
才を疾み兵を以て官を圍み亮を廢して會稽王と爲し瑯琊王休を立つ
綝子の誅せらるる所と爲る

初め漢の姜維は諸葛亮に代りて屢ば魏を伐つ司馬昭之を患ひて鄧
艾、鐘會を遣り兵に將として入りて寇す會、斜谷、賂谷、子午谷より
漢中に趨き艾は狄道(臨洮より)より甘松、沓中(沓中の地)に赴き以て姜
維の軍を牽制す維は魏軍の已に漢中に入るを聞き沓中より還り艾と
大に戦ひ敗走す還りて劍閣(岷谷關)を守りて會を拒く艾進みて陰平
(陰平)に至り無人の地七百里を行き山を鑿ちて道を通し橋閣を造作

す山高くして谷深く又糧道將に匿しからんとす艾、旣を以て自ら裏
み推轉して下る將士皆木を攀ち崖に緣り魚貫して進み江油(漢城と平
陽に達し書を以て漢の將諸葛瞻を誘ふ瞻は亮の子なり其の使を斬
り陣を綿竹(綿の名故漢)に立てし以て待つ艾大に之を破り瞻其の子尙
と皆之に死す漢は魏人卒に至るを意はず城守を爲さず乃ち使を遣し
鹽綬を奉りて艾に詣りて降る皇子北地王謹怒りて曰、若し理窮り力
屈して禍敗將に及ばんとするとき父子君臣城を背いて一戦し同
しく社稷に死し以て先帝に見えて可なり然るに奈何降らんやと漢
主聽かず謹、照烈の廟に哭し先つ妻子を殺して後ち自殺す艾、成都に
至る漢主出でて降る姜維をして降らしむ劍閣將士悉く怒り刀を抜き
石を斫る維、會に降りて會を殺し漢主を復立せんとせしも策成らず
して死す魏、漢主を封して安樂公と爲す是に於て漢凡る二代四十三
年にして亡ひたり時に我か紀元九百二十三年なり

漢の滅ひたるは司馬昭の力なりを以て其の勢益甚しく遂に爵を進めて晋王と爲れり既にして昭死し其の子炎魏主をして位を禪らしたり是を晋の世祖武皇帝と云ふ魏凡う五世四十六年にして亡ふ我か紀元九百二十五年なり是より後を西晋といふ

晋 (一に西晋と云ふ)

按するに司馬炎其の父晋王の爵を襲き尋いて魏の禪を受け國を建てて晋と號し河南洛陽に都す元帝より江東に都す愍帝以前を西晋と爲す乃ち東晋に對して言ふなり

杜預吳を伐つ 竹林の七賢

世祖武皇帝名は炎、姓は司馬氏昭の子にして懿の孫なり即位の後ち十六年にして吳を滅す』初め蜀と魏とは既に亡ひたれども吳は猶ほ

江南一帶の地に據り其の主孫皓、驕暴にして酒色に耽り刑罰を濫にせしかば吳の政大に亂れたるを以て帝吳を滅さんとして羊祜をして竊かに其の隙を伺はしむ祜疾に懼り杜預を薦めて死す杜預兵を率ゐて江陵より出て王濬(蜀)巴蜀より下りて吳に向ふ吳人江の要害の處に鉄鎖を横へて路を截つ又鐵錐の長さ丈餘なるを作りて暗に江中に置きて舟艦を拒む濬大筏數十を作る方百餘歩草を縛して人と爲し甲を披せ仗を持たせて水に善きものをして筏を以て先つ行かめ錐に遇へば輒ち筏を着けて去り又大炬を作りて灌くに麻油を以てして鎖に遇へば之を焼く須臾にして融液斷絶せしが故に船礙まる所なし遂に先つ上流諸郡に克つ預、人をして奇兵八百を率ゐて夜渡る吳の將孫歆懼れて曰、北來の諸軍乃ち江を渡れるかと預、進みて江陵諸邊に克ち濬と兵を合して曰、兵威已に振ふ譬へば竹を破るか如し數節の後は又を迎へて解く復た手を著くる所なりと誠謀して建業

石頭城(西晉府城)に入り吳主皓を降す帝爵を賜ひて歸命侯と爲す吳是に至りて亡ふ時に我か紀元九百四十年なり

帝即位の初め險朴を事とせしが吳既に平きより天下無事なりと謂ひ驕奢淫逸にして又盡く州郡の武備を去る山濤獨り之を憂ひ大に武備の去るべからざるを論ぜしも聽かれず『濤初め魏の時に當り嵇康、阮籍、籍か子咸、向秀、王戎、劉令と相友となり竹林の七賢と號し皆老莊虛無の學を崇尚し禮法を輕蔑して縱酒昏酣して世事を遺落す士大夫皆之を慕效して放達と謂ふ惟り濤仍ほ意を世事に留む濤、晋に至り選舉を典り人物を甄拔し各題目を爲して之を晉主に奏す時人之を稱して山公の啓事(魏武帝其の事と稱)と云へり』武帝在位二十五年にして崩し太子哀立つ是を孝惠皇帝と云ふ時に我か紀元九百五十年なり

賈后の凶險并に清談の流行

諸王子の殘滅

孝惠皇帝名は哀性庸愚なりしが賈皇后凶險淫惡を以て益威を逞ふし太后楊氏の父駿を殺し太后を廢し又汝南王、亮、楚王瑋、及び太保衛灌を殺し衆望を以て張革、裴頠、王戎を用ひ機要を管らむ華、忠を帝室に盡す后凶險なるも猶ほ之を重長し頠と心を同じくして政を輔く故に暗主上に在るも數年の間朝野安靜なり』王戎時と浮沈して匡救する所なし性復た貪吝にして田園天下に遍し牙籜(牙の)を執りて晝夜會計して常に足らざるか若し家に好李あり人の其の種を得んことを恐れて常に其核を鑽る凡う賞拔する所専ら虛名を事とす阮咸の子瞻、戎に見ゆ戎問ひて曰、聖人は名教を貴ひ老莊は自然を明かにす其の旨異なるか同きかと瞻の曰、將(將)と同一きこと無からんやと戎

之を久くして遂に辟いて搽と爲す時人三語の搽と號す蓋し將無同の三語に因りて搽と爲れを以てなり』是の時王衍、樂廣等皆清談を善くす朝野争ひて之を慕ふ衍の弟澄、及び謝鯤、畢卓等皆任放を以て達と爲し醉裸尚ほ無禮と爲さす卓一夕隣舍に忍ひ醸麴の間に盜み飲み守者の縛する所と爲る明旦之を視れば罪吏部(北時に吏部)なり樂廣聞きて笑ひて曰名教の中自ら樂地あり何う必ずしも爾らんやと亦以て當時の状を見るへし

是の時宣帝(司馬懿)の第九子趙王倫、賈后の暴威を愠り詔を矯めて兵を以て宮を圍み后、及び張華、裴頠を殺して自ら位を篡はんと謀る淮南王允、兵を率きて倫を討ず能はずして死す倫、官臣衛尉、石崇等を殺し自ら九錫を加へ帝に逼りて位を禪らむ』齊王冏、成都王穎、河間王顒、等兵を舉げ倫を誅し帝をして位に復さしむ冏、驕奢にして權を擅にせしかば顒、長沙王又をして冏を殺さしむ穎亦功を恃みて驕

奢なり已にして顒と兵を舉げて反し又帝を奉りて穎と戦ふ穎勝に乘りて京師に入り丞相と爲る已にして顒、穎を表して皇太弟と爲せり』東海王越帝を奉りて穎を征せんとす穎、兵を遣りて蕩陰(魏影都)に拒戦す帝の頬三矢を中つ侍中嵇紹、身を以て帝を衛り遂に殺さる血、帝の衣に濺く穎遂に帝を迎へて鄴(魏都)に入る左右衣を浣はんと請ふ帝の曰、嵇侍中の血浣ふ勿れと顒又帝を奉りて洛に還る顒の將、張方時に洛に在り帝を長安に遷す顒、穎を廢して豫章王熾を太弟と爲す』東海王越兵を發して惠帝を迎へて洛に還れり既にして顒、穎、皆殺され内亂初めて平きしが帝後ち麵を食ひ毒に中りて崩す或は云ふ王越の鳩する所と趙王倫が亂後諸王迭に相殘滅して天下大に亂れたり是の時我が紀元九百六十五年なり太弟立つ是を孝懷皇帝と爲す

劉淵、漢王と稱す

戎狄の割據

諸王殘滅の後ち劉淵と云ふものあり自ら大單于と稱し甚た勢力あり淵は故と南匈奴の後なり漢魏より以來中國に臣たり其の先世自ら漢の甥たりしを以て漢姓を冒す父豹、左部の帥と爲る幼にして博學なり嘗て曰、吾れ隨陸（隨陸、匈奴の部族也）が武なくして高帝に遇ひて封侯の業を建つること能はず絳灌が文なくして文帝に遇ひて庠序の教を興すこと能はざるを耻つと武事を兼ね學べり豹死し武帝淵を以て代へて五部の帥と爲す既にして北部の都尉と爲り五部の豪傑多く之に歸し帝の世に及びて五部の大都督と爲り後ち左國城（山西、清水縣にあり）に至り國を建て漢と稱し漢王といへり

其の部將劉聰、劉曜、王彌、石勒皆英名あり聰は淵の子にして經史に通ず曜は淵の族子にして文武の才あり王彌は東萊の人にして騎射を善

くす石勒は羯人にして天資磊砢勇略あり諸豪此の如く集合せるを以て漢の勢ありしは怪むは足らざるなり』劉淵益勢に乗して亦帝と稱し平陽（山西、府）に都し諸將を以て來寇せしむ晉の大傅越、將を遣して拒き戦はしめしか屢、利を失へり既にして淵殂し太子和位に即きて聰を殺さんとす聰依りて和を弑して自ら位に上り又劉曜、石勒、王彌等を遣して來り寇せしむ漢兵洛陽に迫るに及び越疾に懼りて軍中に薨せしが王衍等其の喪を奉りて還らんとし大に石勒に破られ晉の宗族皆擒と爲れり尋きて劉曜、王彌等洛陽を陥れ懷帝を執へて平陽に送れり懷帝の姪、秦王業、長安に入りて行臺を建てたりしか懷帝の弑されたるに及びて位に即く是を孝愍皇帝と云ふ時に我が紀元九百七十三年なり

愍帝専ら麴允と索琳とに軍國の事を委托せしか劉曜の來りて長安を圍むに及びて城中糧食盡き帝出でて降り允は自殺し琳は殺されたり

劉曜帝を平陽に送る聰、群臣を享す帝に命じて青衣を著け酒を行ひ
爵を洗はしむ後ち帝、害に遇ふ西晋武帝より是に至りて凡う四世五
十二年司馬懿の曾孫瑯琊王建康(江蘇省江都縣)にありて帝位に即く是を東晋
の中宗元皇帝といふ時に我か紀元九百七十七年なり』是の時劉聰は
河北に據り氏種の李雄も亦蜀に入りて國を建てて成と稱し又鮮卑
の慕容廆は大棘城(遼寧省錦州府義州西北にあり)に據りて鮮卑大單于と稱し鮮卑の
拓跋祿官は上谷(直隸省蔚州)の北に據りて可汗と稱す故に東晋は東南一帯
の地を有するに止まれりと謂つへ

東晋(江東建業に都す故に云ふ)

中宗江東に割據す 王敦反を謀る

中宗元皇帝名は睿、司馬懿の曾孫なり懷帝の時、安東將軍と爲りて揚

州諸軍に都督と爲り建業を鎮す睿、王導を以て謀主と爲し事毎に詢
ふ導諸の名士、顧榮、賀循、紀瞻の輩百餘人を薦めて掾屬と爲し新舊
を撫綏し大に江東の人心を獲たり』是より先き桓彝、亂を避けて江
を過き睿か微弱なるを憂ひ既にして王導を見、退きて周顛に謂ひて
曰、江左(江)に管夷吾(管仲にして齊の桓公を輔け稱ふ)あり吾れ憂なると諸
の名士新亭(江蘇省南京府城南に在り)に遊宴す顛、中座にして歎いて曰、風
景殊ならざるも目を舉ぐれば山河の異なるありと蓋し西晋の時は諸
の名士多く河水の濱に遊宴せしも今は建業に僻處し亦江水の畔に於
てせるか故に均しく水涯にして風景相似たりと雖も唯、江河の異あ
るを以て中原の没落已に久しきを歎せるなり導か曰、當るに力を王
室に戮せ共に神州(中)を復すへ何う楚囚と爲りて對泣するに至ら
んと愍帝、睿を以て左丞相と爲す

洛陽の祖逖、少きより大志あり嘗て劉琨と同しく寢す中夜雞聲を聞

き士を蹴り起ちて曰、此れ惡聲に非ざるなりと(亂の中夜に啼くと以て惡と音くると爲し珉と稱す)因りて起舞す是に及びて南に渡り兵を睿に請ふ睿素より北伐の志なく故に逃を以て豫州の刺史と爲し兵千人を與ふ逃、江を渡り中流にいて楫を撃ちて誓ひて曰、祖逖、中原を清むること能はずして復た濟らは此の江の如きあらんと遂に淮陰に屯す長安陷るに及びて睿師を出して露次一檄を移して北征せんと果さず明年遂に皇帝の位に即く

初め劉琨、祖逖と名を齊しくす琨嘗て人に謂ひて曰、吾れ戈を枕にして旦を待つ常に祖生の吾に先ちて鞭を著けんことを恐ると(先は功名と謂ふ)後ち遂に人の爲めに殺さる逃、亦、王敦か朝廷と隙を構へて内難を生せんとするを聞きて大功の遂げざることを悟り感激病みて卒す是時王敦反を謀る初め中宗の江東を鎮せし時王敦征討を總へ其の從兄王導機政を專にし其の族人皆顯用せらる後ち敦、驕恣なり帝之を

惡み朝臣、劉隗刀協を引きて王氏を抑損す敦益々不平なり遂に兵を武昌に擧げ隗、協を罪状す導、宗族を帥るて罪を待つ敦、石頭城に據る協、隗等出でて戰ひ大に敗る帝憂悶して死す其の子紹立つ之を肅宗明皇帝と爲す時に我か紀元九百八十二年なり

王導、敦を滅す 陶侃、璧を運ぶ

肅宗明皇帝の時に及びて王導大都督と爲り諸軍を督して敦を討す時に敦病に罹り敦璞をして筮せしむ璞曰、明公事を起さは禍必ず久しからすと敦大に怒りて曰、卿か壽幾何う璞曰、命今日の日中に盡きんと遂に敦の爲めに斬らる帝微服して自ら出て敦か軍を覘ふ敦、晝夢む日輪其の營を環ると驚き寤めて曰、黃鬚鮮卑の兒來るやと帝の母荀氏は燕人なり帝外氏に類し黃鬚あるを以ての故なり丞かに人を以て帝を追はしめしも及はず帝諸軍を帥わて出て、南皇堂(江寧に在り)

に屯し夜壯士を募りて水を渡り敦か兄の王舎か軍を掩ひ大に破る
敦其の敗を聞きて曰、我が兄は老婢のみ門戸衰へ世事去らんと云ひ
て因りて勢を作し起ちて自ら行かんと欲し困乏して復た臥し尋さ
て卒す敦か党悉く平く敦か屍を發して之を斬る有司王導を罪せんと
奏す帝曰、導大義を以て親を滅せり十世之を宥さんとして悉く問ふ所
なし

是の時陶侃と云ふもの荊州の諸軍を督せり侃少うして孤貧なり范滂
之に過きる侃か母湛氏髪を截りて賣りて酒食を爲る滂爲めに侃を薦
め遂に名を知られ屢出でく叛賊を平け功あり後ち廣州の刺史と爲
りしとき侃、朝に百蠻を齋外に運ひ暮に齋内に運ふ人々の故を問ふ
答へて曰、吾方に力を中原に致さんとす故に勞を習ふのみと侃性聰
敏恭勤なり嘗て曰、大禹は聖人なり寸陰を惜む衆人は當るに分陰を
惜むへいと諸參佐の酒器捕博(博、賭博)を取りて悉く江に投して曰、博

捕は牧猪奴の戯のみと嘗て船を造る竹頭木屑を籍して之を掌らしむ
後ち正會(証明)に雪霽れ地濕ふ木屑を以て地に布く後ち蜀を征する
の師あるに及びて侃か竹頭を得て釘を作り船を装ふ後ち明帝の時に
及びて卒せり』帝崩し太子顯立つ是を顯宗成皇帝と爲す時に我が紀
元九百八十五年なり

石勒帝と稱す 桓温の攻伐

顯宗成皇帝の時に當りて蘇峻、歷陽(郡、淮西に屬)に在りて朝廷を輕ん
亡命を招納して闕を犯す、陶侃、温嶠等を討して峻を誅戮す』是の時
後趙の石勒天王と稱し尋いて帝と稱す嘗て大に群臣を饗し問ひて
曰、朕は古の何の主に方ふ可き徐光對へて曰、漢高よりも過きたり勒
笑ひて曰、人豈自ら知らざらんや卿か言太だ過きたり若し高帝に遇
はく北面して事へ韓信彭越と肩を比へんのみ若し光武に遇はく當る

に中原に並び驅るへ未だ鹿、誰の手に落ちんことを知らず大丈夫
 事を行はば當さの確々落々たること日月の皎然たるか如くなるへ
 終に曹孟德(魏)司馬仲達(司馬)か人の孤兒寡婦を欺きて天下を取る
 に效はざるなりと勸勞すと雖も好みて人をして書を読みめて之を
 聽き時に其の意を以て得失を論す聞く者悦服す嘗て漢書を讀むを聽
 き酈食其か勸めて六國の後を立つるに至り驚きて曰、此の法失せり
 何を以て遂に天下を得たると張良か諫を聞くに及びて乃ち曰、賴に
 此あるのみと後ち好を晋に修め遂に卒し其の子弘立つ

是の時成主李雄兄の子班を以て太子と爲し雄死し其の族子漢王壽に
 至り國號を改めて漢といへり』拓跋氏は什翼健克く祖業を修め東は
 濊貊(東夷の種名今の朝鮮の北境に居る)より西は破落那(漢の大宛國今の中亞細亞の地)に及び皆其
 の版圖に歸し衆數十萬を有し盛樂に都し愈盛なり』當時晋、慕容皝
 を封し燕王と爲せり孰頗る權略ありて勢ひ拓跋氏と相匹敵せり是れ

晋の當時北方の形勢たり

帝崩し康皇帝の時に至り荆江の軍事度翼と云ふものあり人と爲り慄
 慨にして浮華を尙はす世の重する所と爲れり嘗て桓温の人と爲りを
 知り之を薦めて曰、是英雄の才宜しく委するに方召(方望)の任を以て
 すへいと自ら北方を征伐するを以て事と爲し温をしてその前鋒の督
 とならしむ孝宗穆帝の時に至り翼卒し温荆梁等の州の軍事を都督し
 漢を伐ち又秦を伐ちて大に秦の兵を藍田(安西)に敗り轉戦して灊上
 に至る時に北海の王猛と云ふものあり倜儻にして大志あり温の關
 に入ると聞きて禍を被て來謁し虱を捫りて當世の務を談し旁ら人な
 きか若し温之を異と問ひて曰、吾れ命を奉りて殘賊を除く而るに
 三秦の豪傑未だ至るものあらざるは何うや猛の曰、公數千里を遠し
 とせず深く敵境に入る今長安は咫尺なり而して灊水を渡らす百姓未
 だ公の心を知らず至らざる所以なりと蓋し温の秦を伐つは功名を建

て江東を鎮服せんと欲し恢復の志あるにあらす猛故にその心事を摘發せるなり温黙して答へず遂に秦兵と白鹿原(永興縣に在り)に戦ひ利あらず温軍を率わて猛と共に還らんとせしも猛就かす後ち猛、秦主符堅に従ひ水魚の交りを爲し功名を立てたりと云ふ

淝水の役

漢玄反と謀る

帝崩し帝奕の時に至り燕人洛陽を攻め陥る温師を帥わて燕を伐ち枋頭に敗れて還る是時秦の符堅の君生を弑し自ら大秦王と稱し王猛を薦用し勢甚た猖獗なり後ち猛卒す符堅慟哭して曰、天吾を以て六合を平一せしむるを欲せざるや何ぞ吾が景略(韜略)を奪ふの速かなると猛終りに臨み堅に謂ひて曰、晋江南の僻處すと雖も然れども正朔相承け上下安和なり臣没せし後ち願はくは晋を以て圖ることを爲す勿れ鮮卑(慕容)西羌(氏)は我か仇敵なり宜しく之を除きて社稷を

安んずへしと猛人と爲り剛明清肅秦の富強を得しは全く猛の力に依り後ち符堅、猛の遺言に背き兵を擧げて晋を攻む或る人謂く晋には長江の險あり輒く師を出すへからす堅曰、吾の衆を以てせば鞭を江に投ずるもその流を斷つへしと遂に長安の戍卒六十餘萬、騎二十七萬を發す晋、謝石を以て征討大都督と爲し謝玄を前鋒都督と爲し衆八萬を督して之を拒く劉牢之、精兵五千を帥わて洛澗(水、河南府新安縣、白石山に在り)に趨く直に水を渡りて秦の前鋒梁成を撃ちて之を斬り石等(東、南、西、北)に趨く直に水を渡りて秦の前鋒梁成を撃ちて之を斬り石等水陸より進む堅、晋兵の部伍整ふを望み又八公山(在り、北)の草木を望み皆以て晋の兵と爲し大に懼る秦兵淝水(信陽郡、四方山に在り、北)に逼りて陣す玄人を以て謂はしめて曰、陣を移して少しく却て我が兵を以て渡ることを得せしめよ以て勝負を決せんと堅、晋の兵に聽き羊は渡るとき之を蹙めんと欲し兵を壓きて却けしむ秦の兵退きて復た止むへからす晋の將陣後にあり大に呼びて曰、秦兵敗ると秦軍遂に

潰ゆ玄等勝に乗して追ひ撃つ秦兵大に敗れ死するもの野を蔽ひ川を塞く走るもの風聲鶴涙を聞きて皆晋兵至ると爲り大に狼狽して長安に還れり是より慕容垂、姚萇等の臣屬せしもの大抵皆秦に背く時に我か紀元千四十四三年なり

初め桓温の材略威望を恃み陰かに不臣の志を蓄ふ嘗て枕を撫り歎いて曰、男子芳を百世に流すこと能はされは臭を萬年に遺すへいと而るに枋頭の一敗より威名頓に挫けしを以て帝奕を廢し簡文帝を立て、以て威權を立つ烈宗皇帝の時に至り兵を帥いて來朝せしかは都下洶然として云ふ温、王謝を誅して晋祚を移さんと而して間もなくして疾みて姑孰に還り諷して九錫を求む安、故さらしうの事を緩くす尋いて卒し後ち安帝の時に至り其の子桓玄反を謀る初め玄、谷温に嗣ぎて南郡(江)公と爲りうの才地を貢みて雄豪を以て自ら處る嘗て義興(縣、常州に屬す)に守たり歎いて曰、父は九州の伯たり兒は五湖(烏程縣の故に五湖といふ)の長と爲ると官を棄て、國に還り後ち江州の刺史

と爲り尋いて荆江等の八州の軍事を都督し遂に兵を擧げて反し建康に入り相國と爲り楚王に封せられ九錫を加へ帝に迫りて位を禪らしむ劉裕兵を京口(郡、浙江に屬す、今の鎮江府)に起して大に戦ひて玄を破り遂に之を斬る帝位に復す後ち晋、裕を以て相國と爲り九錫を加ふ而して裕帝を弑しうの弟瑯琊王を立て是を恭皇帝と爲す帝即位の明年中書令傅亮詔草を具して裕に位を禪らしめんとす帝欣然筆を操り左右に謂ひて曰、桓玄の時晋氏已に天下なり而るに重ねて劉公の爲めに延ざるくと將と二十年なり今日の事はもとより甘心する所と遂に書し已にして弑せらる東晋元皇帝より是に至る凡そ十一世一百四年西晋東晋通して一百五十六年にして亡ふ時に我か紀元千七十九年なり

南北朝

南朝は晋より以て之を宋に傳へ宋は之を齊に傳へ齊は梁に傳へ梁は陳に傳ふ北朝は諸國魏に併せられてより魏後ち分れて西魏、東魏と爲り東魏は北齊に傳へ西魏は後周に傳ふ後周は北齊を併せて之を隋に傳へ隋は陳を滅して然して後ち南北混して一と爲る今、南を以て提頭に置き北をうの間に附す但し晋の元帝南渡して江東に都せしより宋、齊、梁、陳の諸國亦皆こゝに都せるを以て之を南朝と稱し北朝亦南に對して之を稱す

宋

劉裕の畧傳

宋魏の交戦

宋の高祖武皇帝姓は劉氏名は祐、彭城の人なり彭城は古の宋の地な

り故に晋の禪を受けて國を建て、宋と號し建康に都す裕生れて母死す父、京口に僑居し之を棄てんとす從母救ひて之を乳す長するに及びて勇健にして大志あり賣履を以て業と爲し樗蒲を好み郷閭の爲めに賤めらる後ち劉牢之の參軍と爲り嘗て出て、賊數千人に遇ふ即ち迎へて之を撃つ從者皆死し裕、岸下に墜つ賊岸に臨みて下り撃たんとせしかは裕、長刀を奪ひて仰きて數人を斫殺して岸に登り大に呼びて獨り之を驅る衆困りて勢に乗し進み撃ちて大に之を破り是に由りて名を知らる其の後ち將相と爲ること二十餘年にして桓玄を誅し孫恩、盧循を平け南燕、後秦を平け卒に晋氏の禪を受く帝卒し文皇帝の時に至り晋徴士陶潛と云ふものあり潛字は淵明潯陽(潯陽の名也)の人にて侃の曾孫なり少くして高趣あり嘗て彭澤(潯陽に屬す)の令と爲る八十日にして郡の督郵至る吏曰、束帶して見る(一)と潛歎して曰、我豈に能く五斗米(縣令の月俸十五石に五斗を食す)の爲めに腰を折りて郷里の小兒に向

はんやと即日印綬を解きて去り歸去來の辭を賦し五柳先生の傳を著す徵せとも就かず自らうの先世晋の臣たるを以て宋の武帝王業漸く隆なりしときより復た肯て宋に仕へず是に至りて世を終へ靖節先生と號す

宋魏、連年互に相侵伐せしは是の時に至り王玄謨と云ふもの宋に勸めて大舉して魏を伐たしむ沈慶之諫めて曰、國を治むるは家を治むるか如し畊は奴に問ふへし織は婢に問ふへし今、國を伐たんと欲して奈何う白面の書生と謀ると宋王從はず竟に玄謨をして師を出さしめ碓礮(城在青州)を取り進みて滑臺(河東)を圍む是より先き魏主、宋の河南を取ると聞きて怒りて曰、我が生れて髮未だ燥かざるに已に河南は是れ我が地なりと聞く今天の時尚ほ熟す姑く戍を斂め北歸し河水の合するを俟ちて鐵騎を以て之を蹂躙しめんと冬に至りて魏主自ら將として河を渡る衆百萬と號す鞞鼓の聲天地に震ふ玄謨懼れ

て走る魏人追ひて撃つ玄謨敗走し魏主兵を引きて南に下り直に瓜步(魏州)に至る江を渡らんと聲言し建康震懼し民皆逃竄して擾やせり宋主石頭城に登り北望して歎いて曰、擅道濟若し在らば豈に胡馬を以て此に至らしめんやと道濟は前朝に仕へて威名甚た重く左右腹心並に百戰を経る是より先き讒を以て収へらる目光炬の如く憤を脱し地に投じて曰乃ち汝か百里の長城(道濟自)を壊るかと既に誅せらる魏人之を聞きて大に喜び是に至りて長驅せり宋人或は玄謨を斬らんと欲す沈慶之を止めて曰、佛狸(魏主)の威天下に震ふ控弦百萬豈に玄謨の能く當る所ならんや且つ戰將を殺して以て自ら弱うするは計にあらざるなりと魏の師還り殺掠勝けて計るへからず丁壯のもの嬰兒を斬截して梁上に貫きて盤舞し過ぐる所焚掠して赤地と爲る春燕歸りて林下に巢くふ宋主即位より二十八年の間號して小康と爲す是に至りて兵革の後ち邑里蕭條たり後ち宋の太子劬、巫蠱呪詛の事

發覺して誅を恐れて帝を殺す武陵王遂に劾を誅して立つ是を世祖
孝武帝と爲す武帝崩らうの子廢帝立ち無道なり宋人之を殺して明皇
帝即位せり後ち數傳して順皇帝の時に至り蕭道成、相國齊公と爲り
已にして九錫を加へ爵を進めて王と爲る宋主遂に位を齊に禪り泣き
て曰、願はくは後身世々復た天王の家に生ることなげんと道成遂
に帝を殺して其の族を滅す宋の高祖より是に至るまで八世凡う五十
九年にして亡ふ時の我か紀元千百三十九年なり

齊

子良佛を信す

東昏侯の淫虐

太祖高帝名は道成、姓は蕭氏、宋の禪を受け位に即き嘗て政を爲すこ
とを參軍劉猷に問ふ猷の曰、政は孝經に在り凡う宋氏の亡ふる所
以、陛下の得る所以のもの皆是なり陛下若し前車の失を戒め加ふる

に寛厚を以てせば危しと雖も安かるへ其の覆轍に循はと安しと雖
も必ず危けんしと齊主歎して曰、儒者の言萬世に寶とすへと帝人と
爲り博學にして文を能くす性清儉、衣中に玉導(導は舞の副)あり之を見て
曰、此を留むるは侈泰の病源を長するなりと即日之を撃ち碎けり
毎に曰、我れ天下を治むること十年ならば當さに黄金を以て土と價
を同うせしめんと在位四年にして殂す世祖武帝繼きて立ち竟陵王
子良を以て司徒と爲す子良篤く釋氏を好み名僧を招致して講論す
世頗る宰相の體を失せりと爲す時に范縝と云ふものあり盛に佛なき
を論す子良の曰、君因果を信せずんは何う富貴貧賤あるを得んと縝
の曰、人生は樹花の同く發して風に隨ふて散するか如く或は簾幌
を拂ひ茵席の上に墜ち或は籬藩に關して糞溷の中に落つ茵席に墜つ
るものは殿下是なり糞溷に落つるものは下官是なり貴賤殊なりと雖
も因果何にか在ると子良以て難するなり縝又神滅論を著す以爲らく

形は神の質、神は形の用なり神の形に於ける猶ほ利の刀に於けるか
 如く刀没して利存するを聞かず形亡ひて神在るへけんやと
 帝崩し數傳して廢帝宗昏侯に至り昏淫狂恣なり幸する所の潘妃を以
 て金を以て蓮花を爲り地上に糊之を歩せしめて曰、此れ歩々蓮花
 を生するなりと左右事を用ふるもの賊虐日に甚く百姓困盡して道
 路に號泣するに至る南雍州の刺史蕭衍、兵を起し進みて建康を圍む
 齊人帝を殺して衍を迎ふ是より先き帝の弟、寶融、兵を江陵に起して
 位に即き和帝と稱し未だ東に歸るに及はずして齊太后制を稱し蕭衍
 を以て相國と爲し梁公に封し尋きて爵を進めて王と爲す和帝遂に弑
 せられ齊遂に亡ふ齊高帝よりは是に至りて七世凡そ二十三年我か紀元
 千百六十二年なり

梁

武帝佛を信す

侯景の亂

高祖武皇帝姓は蕭氏名は衍齊に代りて建康に都す帝博學にして文を
 能く一族を睦ふし士に下り性、酒を飲まず布衣阜帳にして儉素なる
 こと儒者の如く甚た浮屠を信し同泰寺に捨身して幸福を求めんとし
 日に大會を設け御服を釋き法衣を持し清淨大赦を行ふ蓋し捨身とは
 思を斷ち親を辭して一切身を佛に任するを云ふ故を以て帝屢は身
 を佛寺に捨つる毎に群臣錢億萬を以て帝の身を佛に購ふて官に還る
 又宗廟に牲牢を用ふるは冥道を累すと爲し麪を以て之に代ふるの類
 枚擧するに違あらず又是の時印度の僧、菩提達摩、海路より廣州に來
 りしかは帝官中に召して共に佛理を談せり然れども達摩は帝の玄
 旨を領する能はざるを知りて魏に住き嵩山の少林寺に於て寂せり
 是れ支那禪宗の第一祖たり魏主亦佛を信し堂塔の建築尤も盛美を

極めたり武帝魏主と淮水を阻て、屢は戦ふ後ち帝和を乞へとも魏主聽かず武帝爲めに淮堰を築き魏に備ふ長さ九里下の廣さ百四十丈、上の廣さ四十五丈高さ二十丈樹ふるに楊柳を以て、軍壘其の上列り居る後ち淮水暴に漲りて堰壞る其の聲雷の如くにして三百里外に聞ゆ淮に沿ふの城戍村落十餘萬口皆漂流して海に入れり是の時魏は分裂して東魏西魏と爲る東魏は清河王善見(孝文帝の子)を立て、鄴に都し高歡と云ふもの専ら政機に與る西魏は宇文泰といふもの孝武帝を奉りて長安に都し兩魏連年相攻戰して互に勝負あり、後ち歡卒し其の子澄に遺言して曰、侯景専ら河南を制すること十四年なり飛揚跋扈の志あり汝か能く御する所にあらず景に敵するものは惟慕容紹宗なりと景は初め爾朱榮の將たりしか高歡の興るに及びて歡に歸す歡、人と爲り寔にして權詐に富めり曾て東魏の將と爲りて河南の地を鎮せり是に至りて河南を以て西魏に歸し後ち背いて

梁に歸す武帝南豫州の牧と爲す既にして東魏成きを梁に求む其の意侯景を得んと欲するに在り景梁の東魏に通するを恨み遂に壽陽に反し兵を引きて南に渡り建康を圍む梁主即位より以來江左久しく無事なりしか景の兵を擧ぐるに及び天下愕然たり梁主兵を遣し之を攻むれども皆うの敗る所と爲り臺城(晉宋の間朝庭築)圍を受くること五月にして陷る梁主安臥動かす歎して曰、我より之を得我より之を失ふ亦何う恨みんと景入り見ゆ梁主景に謂ひて曰、卿軍中にある久し乃ち勞すること母らんやと景汗を流して對ふること能はず景退き人に謂ひて曰、吾常に鞍に跨りて陣に對し矢石交々下れども遂に怖るゝ心なり今、蕭公を見るに人をして自ら懼れしむ豈天威犯し難きにあらずやと而れども梁主景の爲めに制せられ飲膳も亦裁損せられ憂憤して疾を成し口苦くして蜜を求むれども得ず遂に殂す太子統は先きに死せしを以て景更に其の弟綱を立つ是を簡文帝といふ然れど

も政權は皆景の手にあり帝は虚器を擁するのみなりき時に我か紀元千二百九年なり

霸先の興起

梁主圖書を焼く

是の時東魏の大將軍渤海の王澄うの下の爲に弑せられ弟、洋丞相と爲り齊王に封せられ東魏主に位を禪らしむ世之を北齊と號す東魏建國より百十七年にして亡ふ侯景又自ら宇宙大將軍都督六合諸軍事を加ふ梁主驚きて曰將軍乃ち宇宙の號を有するやと侯景遂に之を弑し自ら立ちて漢王と爲る是より先き始興(郡、梁東に屬す)の太守陳霸先と云ふもの梁室の内亂を憂ひ郡中の豪傑を結合して兵を起して侯景を討す梁の湘東王亦王僧辯をして景を討せしむ景遂に僧辯霸先の爲に敗られ亡けて吳に走り海に入らんと欲するの下の爲めに斬られ尸を建康に送り首を江陵(時に湘東王の都す)に傳へ其の手足を截ちて北齊に

送る蓋し景初め東魏に叛き北齊は東魏の禪りを受くるを以てなり湘東王立つ是を元皇帝と爲す時に我か紀元千二百十二年なり元皇皇帝名は繹、性殘忍なり江陵に即位す侯景の亂より州郡大半西魏に入る蜀も亦魏の爲めに有せらる梁は巴陵(郡、湘東に屬す)より以下建康に至るまで長江を以て限りと爲す突厥魏の西邊を侵し疆工始めて大なり突厥は古の匈奴の北部の種族なり西魏の宇文泰其の主欽を弑し弟廓を立てし梁主の殘忍國政治まらざるに乗し柱國(官名、輔の職)于謹を遣して梁を伐ち江陵に入る時に梁主群臣を會して老子を講す或る人魏兵の至るを告く梁主尙ほ疑ひて復た講を開くこと一日百官戎服して以て聽く數日を歴て魏兵已に城下に至る梁主城を巡りて猶ほ口占して詩を爲る群臣亦和するものあり魏人百道より城を攻む反するもの四門を開き魏の師を納る梁主和を乞ひしも魏人許さず梁主乃ち古今の圖書十四萬卷を焚き寶劍を以て柱を擊ちて之を折り歎いて曰文

武の道今夜に盡きぬと乃ち出て、降る或る人問ふ何の意ありて書を焚く曰、書萬巻を讀むも猶ほ今日ありと尋ざて殺さる』是の時西魏襄陽を取り梁王譽を江陵に徙し帝と稱せしめ兵を屯して之を守る是を後梁と爲し西魏の臣たり王僧辯、陳霸先、晉安王方知を奉して制を建康に稱す貞陽侯淵明は梁の宗室たりしは是より先き北齊の爲めに獲られしは是に至りて兵を以て之を納る王僧辯奉して帝と稱せしめしは陳霸先遂に僧辯を殺し淵明を廢して晉安王を立つ是を敬皇帝と爲す』西魏亦是の時に亡滅す國を建つること四世二十四年なり』梁の丞相陳霸先陳公に封せられ九錫を加へ尋ざて王と爲り後ち梁主を弑し禪を受く梁は高祖武帝よりは是に至りて四世凡そ五十六年にて亡ふ時に我が紀元千二百十七年なり

陳

周の末路

陳主煬公の宴樂

高祖武帝姓は陳、名は霸先、梁の禪を受けて位に即き三年にして殂し數傳して宣皇帝の時に至り北齊政亂れ國遂に亡へり』是の時周主贇、皇后楊氏を立つ后の父隋公楊堅、事を用ひ上柱國大司馬と爲る贇太子たりし時より好みて小人を昵近し立ちて未だ一年ならずして位を闡に傳へ自ら天元皇帝と爲し驕侈彌々甚し未だ一年を歴すして殂す是に於て其の臣楊堅自ら大丞相と爲り相國隋王に進み九錫を加へ周の禪を受く周帝と稱せしより是に至りて五世二十五年にして亡ふ

是の時陳は後主長城煬公の時代たり煬公、太子の時より宴樂を事とし即位の後ち未だ幾ならずして臨春、結綺、望仙等の諸臺閣を起す高と各數十丈連延數十間皆沈檀を以て爲り金玉珠翠之か飾を爲し珠

簾寶帳服玩瑰麗近古未たあらず其の下に石を積みて山と爲し水を引きて池と爲し花卉を雜へ植う而して陳主臨春閣に居り貴妃張麗華と結綺閣に居り龔孔の二貴嬪望仙に居る複道より往來し江總、宰輔と爲り政事を親らせす日に孔範等の文士と後庭に侍宴して之を狎客といひ客と唱和して詩を賦しうの尤も艶麗なるものを來り被らむるに新曲を以てす曲に玉樹後庭花等の名あり君臣酣歌一夕より旦に達す宦官近習内外連結して宗族恣横、貨賂公行せり孔範貴嬪と結ひて兄弟と爲り自ら謂ふ文武の才能舉朝及ふなると將帥過失あれば即ち兵權を奪ふ是に由りて文武解躰せり隋、晉王廣を以て元帥と爲し師を帥わて陳を伐つ揚素、韓擒虎、賀若弼、高穎、等道を分ちて出づ高穎、薛道衡に問ふて曰、江東克つべきやと曰、克九ん昔晉の郭璞の言に江東分れて王たること三百年にして中國と合せんと云へり此の數將に周からんとすと陳主隋の兵あるを聞き近臣に謂ひて

曰、王氣此に在り彼何爲るものうと孔範か曰、長江は天塹なり南北を限隔す今日の虜軍豈に能く飛び渡らんやと飲酒輟めす一日隋兵大霧に乘り大に進み賀若弼は廣漢より江を濟り韓擒虎は横江より雷に乘りて采石(在り)を濟る擒虎進みて新林(在り)より直ちに朱雀門に入る守者皆醉へり是に於て陳人大に駭き降るもの相繼ぎ陳主狼狽して官人十餘を從へて景陽殿に趣き井中に投ず隋兵井を窺ひ石を下さんとすれば陳主乃ち悲泣す因りて繩を以て之を引き張麗華と孔貴嬪と同一く束ねて上げ俘にして歸る陳高祖武帝より是に至りて五世凡て二十二年にして亡ひ南北始めて一に合せり時に隋の文帝位に即きより九年にして我か紀元千二百四十八年なり

隋

文帝弒せらる

煬帝の奢侈

高祖文皇帝姓は楊氏、名は堅、弘農の人なり其の女周の宣帝の后と爲り堅外戚を以て政を秉り遂に周の祚を移し位に即きて九年にして陳を平けて天下一に歸す後ち帝不豫なり太子廣を召して殿中に侍せしむ太子預しめ書を作りて帝の不諱の後事を僕射揚素に問ふ官人其の報を誤りて帝の所に送る帝之を覽て大に悲る帝寵する所の陳夫人出でて、衣を更む太子之を挑む夫人之を拒き免るゝを得たり帝之を聞き悲り床を抵ちて曰、畜生何う大事を付するに足らんと太子之を聞き右庶子張衡をして入りて疾に侍し帝を弑し遂に陳夫人に逼りて悉く帝位に即く是を煬皇帝と爲す』是より先き龍門(郡河南に屬す)の王通、闕に至りて太子の策を獻す文帝用ふること能はず歸りて河汾(水太原山の西に入る)の間に教授し主として五帝三王の道を述ふ死して門人謚して文中子と云ふ今日傳はる所の文中子なる者うの著す所と云ふ煬帝即位幾ならずして洛陽の顯仁宮を營み海内の奇材異石を發し

又嘉木異草珍禽奇獸を求めて苑圃に實つ其の他濟渠を開通し長安の西苑より穀洛の水を引き河に達し河を引きて汴に入れ汴を引きて泗に入れて淮に達す又民十萬を發し判溝(水廣陵に在り)を開きて江に入れ旁ら御道を築き樹うるに柳を以てす長安より江都(無錫州に屬す)に至るまで離宮を置くこと四十餘所人を江南に遣し龍舟及び雜船數萬艘を造らしめ以て遊幸の用に備ふ苑の周り二百里其中池を爲る周り十餘里蓬萊方丈瀛州の諸山を爲る高さ百餘尺臺觀宮殿山上に羅絡す池の北に渠あり縈紆して海に注ぐ渠に緣りて十六の院を作り門皆渠に臨み每院四品の婦人を以て之を主らしめ華麗を窮極す宮樹凋落すれば綵を剪りて花葉を作り沼田も亦綵を剪りて荷菱菱茨を爲り色渝はれば則ち新しきものに易ふ月夜宮女數千騎を從へ苑中を逍遙し清夜遊の曲を作り馬上に之を奏す又龍舟に乗して江都に遊幸するや舟子八萬餘人を用ひ舳艫相接すること二百餘里騎兵兩岸に翊して行く過くる

所の州縣五百里内は皆食を献せしむ
 後ち又、永濟の渠を開き沁水を引き南して河に達し北は涿郡に通す
 又汾陽宮(汾州の北に在り)を營み又洛口倉を蓋(縣河南に在り)の東南に置く城の周り
 二十餘里三千甍を穿ち興洛倉を洛陽の北に置き三百甍を穿つ甍皆
 八千石を容る帝或は洛陽に如き或は江都に如き或は北巡して榆林
(縣、雲中に屬す)金河(縣、雲州に屬す)に至り或は五原に如き長城を巡り或は河右を巡る
 時に天下承平百物豐實なり突厥の可汗盧帳を奉して車駕を俟つ帝う
 の帳に幸し大に悦ひ詩を賦せり又天下の鷹師及び散樂を徵す諸蕃來
 朝すれば百戲を正門に陳せしむ費巨萬歳々以て常と爲せり

高麗の征伐

隋室の滅亡

當時高麗王を徵して入朝せしむ至らず因りて帝之を伐たんと欲し全
 國の兵を涿郡に會し河南淮南江南に敕して戎車五萬乘を造り衣甲等

を供載し河南河北の民夫を發し軍須に供す江淮以南の民夫、船を以
 て黎陽(縣、滑州に屬す)及び洛口の諸倉の米を運ふ往還常に數十人晝夜絶えず
 死するもの多し百姓窮困し群盜大に起る帝竟に高麗を伐ち遼東に至
 り利あらずして還る是に於て楚公楊玄感、朝政の日に紊るを見て
 潛かに亂を作さんとを謀り黎陽に督運して運夫の少壯なるもの五千
 餘人を得て遂に反す帝伐ちて之を敗死せしめ又高麗を伐つ高麗降を
 乞ふ帝長安に還り已にして洛陽或は汾陽江都に如き巡遊虚歲なり
 是の時蒲山公李密兵を起し梁を圖る唐公李密も亦兵を大原(山西、大原府)
 に起したり初め淵の父柄北周に仕へて唐公に封せられしか淵も亦
 爵を嗣きて唐公と爲り隋に仕へて弘化(甘肅、弘化府)の留守と爲れり盜賊の
 蜂起するに及びて山東の慰撫大使となりて晉陽に在り淵の次子世民
 海内の方に亂れたるを見て竊かに蒼生を安んずるの志を有し晉陽の
 裴寂等と共に淵に兵を舉げんことを勸誘す淵因りて遠近の兵を募り

遂に長安に入れり時に帝尚ほ江都にありしか淵遙に尊ひて大上皇と爲し別に帝の孫、侑を立て、恭帝と爲す淵大丞相と爲り唐王に封せらる煬帝江都にありて中原の既に亂るを見て北に歸るの心なく淫虐日に甚しく酒卮口を離さず嘗て鏡を引き自ら照して曰、好頭頸誰か之を斫るべきと后蕭氏驚きその故を問ふ帝笑ひて曰、貴賤苦樂更々迭に之を爲す亦何う傷まんと從駕關中の人多し歸るを思ひて遂に謀叛し許公宇文化及を以て主と爲し兵を引きて官に入り煬帝を縊殺す宗室少長となく皆死す惟り秦王浩(煬帝の弟)を存して之を立ち化及自ら大丞相と爲り衆を擁して西す李淵變を聞き慟哭して曰、吾北面して人の事へ道を失ふて救ふと能はざるも敢て哀を忘れんやと追諡して煬と云へり隋帝侑即位半年にして唐に禪る隋高祖よりは是に至りて三世凡て三十八年にして亡ふ時に我が推古帝二十六年なり是の時郡雄四方に起り鄱陽(鄱陽州)の林士弘江南に據り楚帝と稱す馬邑の

校尉劉武周朔方の郎將梁師都各郡に據りて兵を起し後ち突厥劉武周を定陽の可汗(晉克寒、北方の種)樓煩(山西に屬す)定襄雁門の諸郡を取る金城の校尉薛舉は兵を隴西に起し自ら西秦の霸王と稱し司馬李軌亦兵を河西に起して自ら涼王と稱す薛舉自ら秦帝と稱し徙りて天水に據る銑兵を巴陵に起して自ら梁王と稱し後ち帝を江陵に稱す唐の李淵世民父子是等の群雄を平定して梁の禪を受け以て天下を統一せりこの帝業の困難知るべきなり

支那史綱 上卷 肆

明治廿七年五月十二日印刷
明治廿七年五月十五日發行

定價金三拾五錢



著作者 西村 豊

東京市神田區猿樂町三丁目一番地

發行者 宮崎 道正

東京市神田區裏神保町一番地

印刷者 熊田 宜遜

東京市神田區錦町三丁目廿五番地

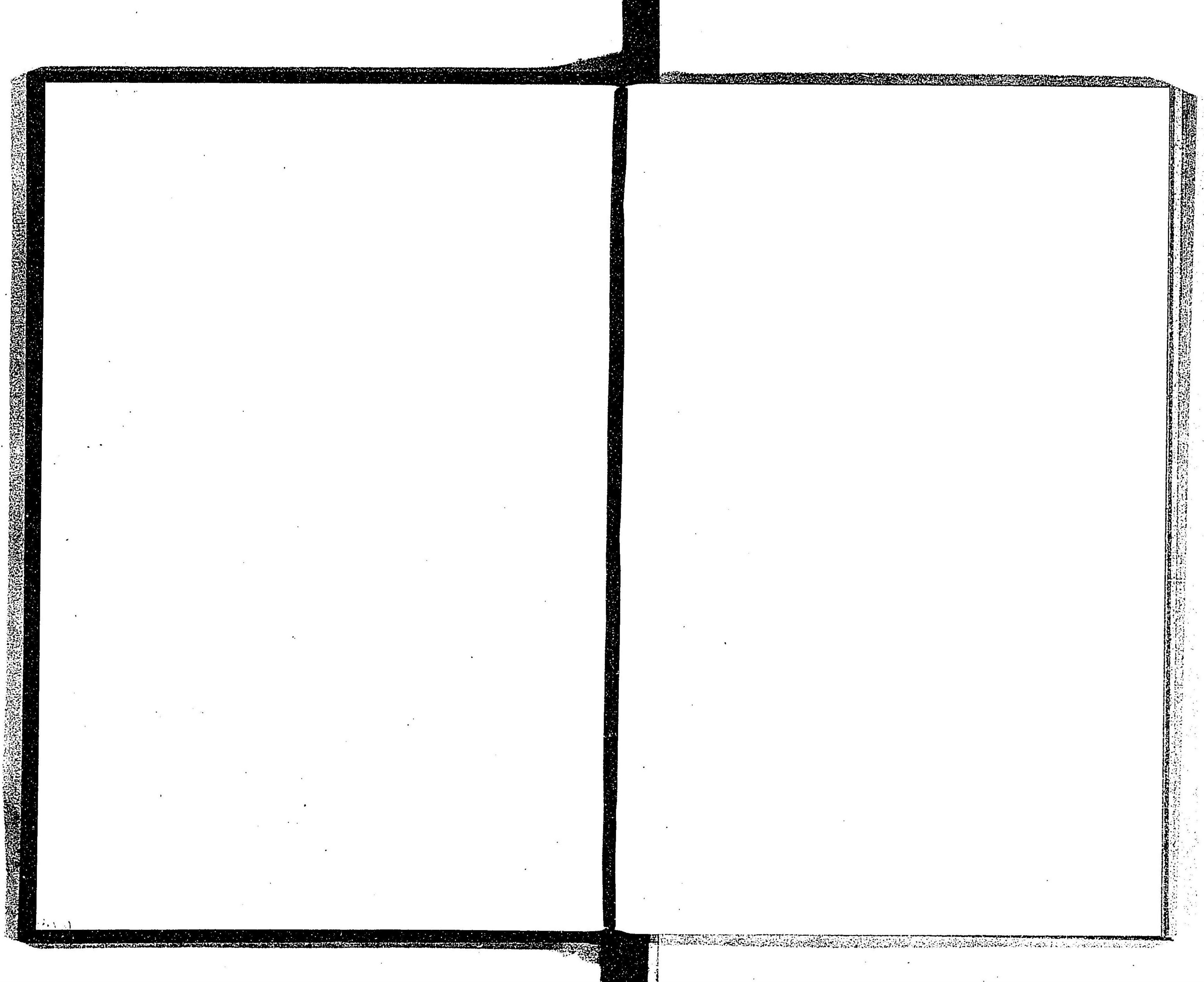
發兌書肆 敬業社

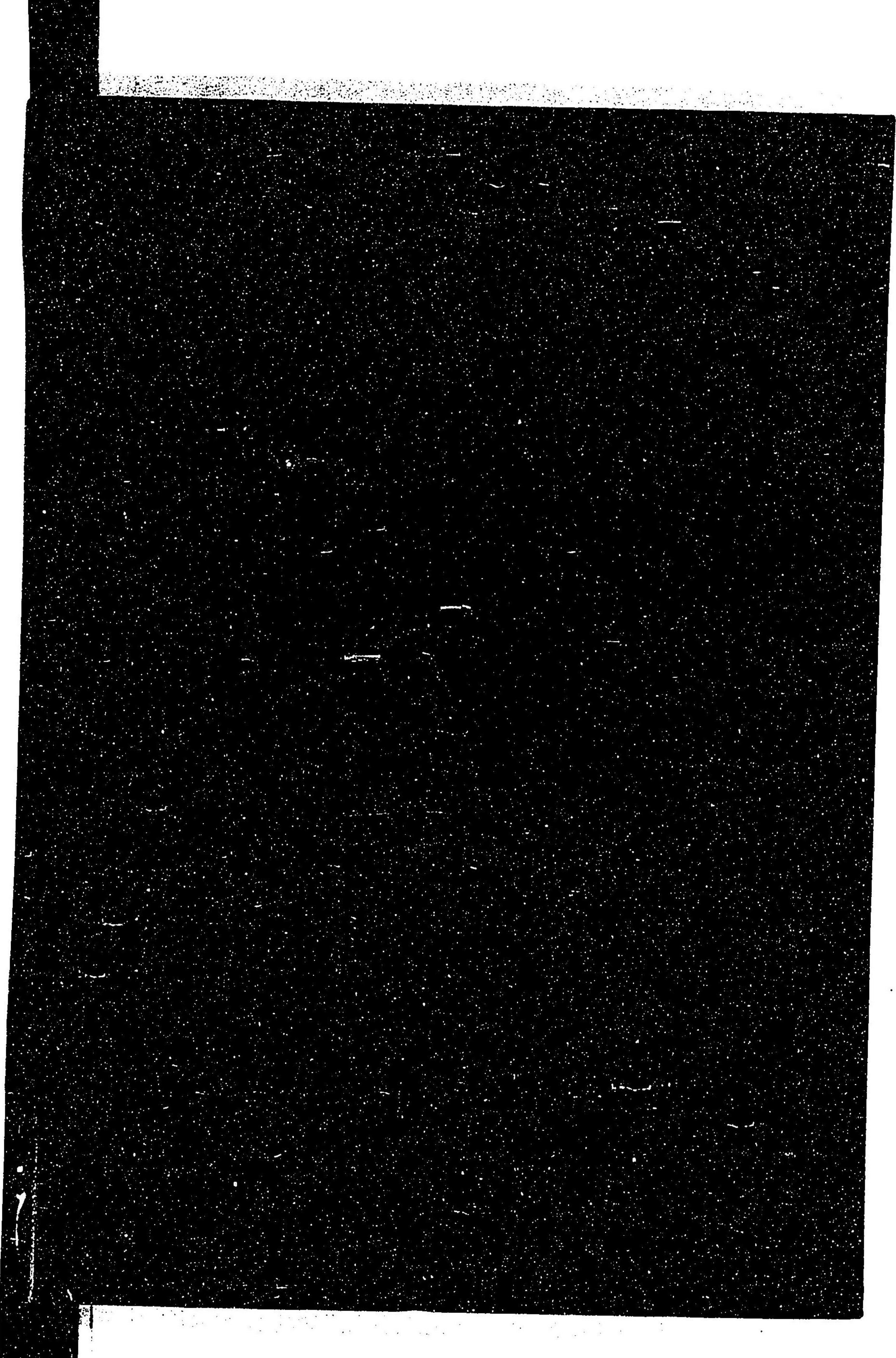
東京市神田區裏神保町一番地

五三P44

各地賣捌書肆

大坂市備後町四丁目	敬業社出張所	熊本市新町	長崎
東京市日本橋區通三丁目	丸善 商店	鹿兒島市仲町	吉田 幸兵衛
全 通一丁目	大倉 書店	山口中市町	青田 英堂
全 新大坂町	小林 喜橋門	滋賀縣大津	淡海 堂
全 神田區表神保町	中西屋 邦太	甲府市	柳正 堂
全 京橋區竹川町	共益 商社	信州松本	水琴 堂
全 南傳馬町	吉川 幸七	全 長野大門町	高美 書店
大坂市備後町四丁目	梅原 龜七	全 上田	西澤 喜太郎
全	石井 鈞三郎	全 越中富山市	同 支店
全	吉岡 幸助	全 四十物町	大橋 甚吾
全 南區心齋橋	松村 九兵衛	全 越後水原	中田 書店
全 北久太郎町	柳原 喜兵衛	全 新潟市	西村 六平
全 北久寶寺町	三木 佐助	全 千葉縣千葉本町	櫻井 産作
名古屋市本町三丁目	川瀬 代助	全 横濱市辨天町	多田 芝店
全 玉屋町	片野 東四郎	全 仙臺市大町	丸屋 書店
伊勢津市大門町	河島 九右衛門	全 岩代郡山	文屋 學館
和歌山市本町	平井 文助	全 山形市七日町	高屋 久之丞
高知市種崎町	澤本 駒吉	全	五十嵐 大右衛門
福岡市博多中島町	森岡 書店	全	牧野 徳太郎
全	積善館 支店	全	鈴木 鐵治
筑後久留米市米屋町	菊竹 書店	全 羽後秋田市大町	小鹽 武吉
長崎市白山町	河内 壯助	全 北海道札幌南一條	全
佐賀市酒屋町	安中 半三郎		





44
237

003096-001-7

44-237

支那史綱

西村 豊/著

上

M27

ACC-1107



